

「漢字のみで書かれていることにどのように立てばよいか。ただ狭義訓詁のみがそこに立つ方法を有している。」

(中略) 漢字だけで日本語文を、歌を記すことに、八世紀の人たちが苦闘したとこのことを見るのは、どこか間違っているように思う。それが当然であることに不便という感想はない。(中略) 便利さはひらかなによつて開かれ、我々は長くそこに住まってきた。萬葉の訓詁とは、そこから彼らに至る、細く、しかし確かな道である。」

本書末尾に置かれたこの一節は、これからの研究者の方向を示唆し、これからの研究者の道標となるべく編まれたものに寄せられた一編の結びであり、本書の結びでもある。随所に「ひらかなの世界に住まう」ことへの自覚を促すのは、漢字のみでかかれた世界に踏み込む我々への警鐘であり、本書の基本的な姿勢であ

る。そしてその視界にあるのは、「漢字表現」という対象である。

記述は日本語と漢字との出会いから始まり、主に記紀萬葉の「漢字表現」(特に「日本語表現」としての漢字表現)を対象として、そこに方法としての「訓詁」の必要性、いや必須性を説く。なぜならそれは、我々が読み解くための方法だけではなく、「漢字表現」をものした古代の人々の方法であったからである。

漢字専用時代であつて漢字で書くことの多様性は、「漢字表現」というに尽きる。漢字による「表現」でしかない。それが漢字である限り「意味喚起」からは逃れられない。たとえ、「仮名」書きであろうとそれは例外ではない。むしろ、萬葉の歌々の訓字と仮名との交渉こそが、やがて「ひらかな」歌の漢語表現(中国詩の発想と方法の撰

取)を可能にする。著者はこれを「漢字表現」の「内化」および「内実化」に求める。その背景に「訓詁」があることを、みごとに描き出すのである。

「訓詁」という語(ターム)についての説明は本書にはない。本書に展開される考証のすべてが「訓詁」とはいかなるものかを示している。それによつて、古事記の文章の性格が語られ、歌謡と本文との関係が浮き彫りにされる。萬葉集における訓の契機の多様性が語られ、訓字と仮名書きとの交渉が、「ひらかな」歌誕生を予見するのである。漢字の借音による表音用法から出発し、萬葉「仮名」を経て「ひらかな」へと展開する、日本語表記のための表音文字獲得への道程において、歌を「仮名」で書くことには二つの側面(位相)があつたと思量する。ひとつには木簡に記された「なにはづ」の歌

に代表される基層としての仮名書きであり、ひとつには本書に示された記紀歌謡から萬葉歌につながる仮名書きである。その両者(両面)は、「訓詁」に基づく「漢字表現」という統括の対象として語られるべきであり、そこに古今集へと展開するひとつの方向性が示された、と読んだ。今後、歌以外の日用の仮名書きと歌の仮名書きとをどう相対化するかが、我々の課題として提示されている。

本書の全編に展開される、個々の考証についての評言を、評者は持たない。一読三嘆。その口調まで思い起こされる「先師晩年の戒め」(一八五頁)を噛みしめたい。

古代日本語研究は「訓詁」なくして成り立たないと、痛感させられる。

(A5版・四八〇頁・定価  
一一五〇円・塙書房)

— 評者・大阪府立大学教授 —